

|      |      |       |
|------|------|-------|
|      | 学位記  | 文科省報告 |
| 2012 | 6122 | 甲3751 |

## 博士学位論文審査要旨

申請者：丁允英 (早稲田大学教育学研究科博士課程単位取得満期退学  
漢陽大学非常勤講師)

論文題目：否定表現を伴う副詞の日韓対照研究

申請学位：博士(学術)

審査員：主査 小林 賢次 早稲田大学教育・総合科学学術院特任教授 博士(文学)  
松木 正恵 早稲田大学教育・総合科学学術院教授  
仁科 明 早稲田大学教育・総合科学学術院准教授  
井上 優 麗澤大学教授

### 1 本論文の目的

本論文は、現代日本語における否定表現を伴う副詞のうち、辞書類において意味記述に互いの語がメタ言語として使用され類義関係にあるもの、また、韓国語に訳した場合、類義の対応関係をもつ基本的なものを選び、日本語・韓国語双方の副詞それぞれの相違点と相互の類似点について分析・考察したものである。特に韓国語との対照にもとづく日本語副詞の意味・用法の研究を中心としている。

具体的概念をもつ名詞などとは違って抽象的な意味を有する副詞の場合、辞書を通してそれぞれの語の正確な意味や用法を把握することはたやすいことではない。こうした点は日本語学習者の副詞習得及び適格な使い分けの妨げとなっている。また、「否定」も習得が難しいとされる表現である。その理由として、「否定」という現象自体がもつ構文的・意味的に複雑な性格があり、母語の干渉もさまざまに関わってくるからである。

こうした背景を基に、本論文では、日・韓両言語における否定表現を伴う副詞に関して、相互の対訳資料などを中心資料として両言語の対照を行った。本研究の成果は、韓国語を母語とする日本語学習者、日本語を母語とする韓国語学習者のため、すなわち、第二言語教育にも貢献しうるものと考えられる。

### 2 本論文の構成

本論文の構成は、次のとおりである。

#### 第1章 序論

1. 研究の目的
2. 対象とする副詞の範囲
3. 研究方法
4. 本研究の構成

## 第2章 先行研究の概観

1. 先行研究における「否定」について
  - 1.1 日本語に関して
  - 1.2 韓国語に関して
2. 日・韓両言語における否定表現の現れ方
  - 2.1 日本語の否定表現の現れ方
  - 2.2 韓国語の否定表現の現れ方
3. 日・韓両言語における「否定表現」を伴う副詞について
  - 3.1 日本語の否定副詞
  - 3.2 韓国語の否定副詞
4. 本研究における立場

## 第3章 否定表現を伴う副詞

1. 本研究における否定副詞の分類
  - 1.1 事実確認的否定副詞
  - 1.2 遂行的否定副詞
    - 2.1 「不満足」否定副詞
    - 2.2 「意志」否定副詞
2. 考察
  - 2.1. 事実確認的否定副詞
    - 2.1.1 「なかなか」について
    - 2.1.2 「どうてい」について
    - 2.1.3 「ぜんぜん」について
    - 2.1.4 「一向に」について
    - 2.1.5 「ちっとも」について
    - 2.1.6 「あまり」について
    - 2.1.7 まとめ
  - 2.2 遂行的否定副詞
    - 2.1 「どうしても」について
    - 2.2 「けっして」について
    - 2.3 「とても」について
    - 2.4 まとめ

### 否定表現における副詞の日・韓対照

1. 先行研究
2. 考察方法
3. 考察
  - 3.1 「なかなか」と「좀처럼 *jomcheoreom*」
  - 3.2 「とても／どうしても／どうてい」と「도저히 *dojeohi*」について
  - 3.3 「一向に／どうしても／とても／ぜんぜん」と「도무지 *domuji*」
  - 3.4 「一向に／ぜんぜん／ちっとも」と「전혀 *jeonhyeo*」

- 3.5 「あまり」と「그다지 geudaji／별로 byeollo」
- 3.6 「どうしても／とうてい／とても」と「아무래도 amuraedo」について
- 3.7 「けっして」と「결코 gyeolko」について

#### 4. まとめ

#### 第5章 結論

- 1. 本論文の結論
- 2. 今後の課題と展望

### 3 本論文の概要

#### 第1章 序論

第1章では、まず、研究の背景として、日本語学習者において「否定表現」と「副詞」は、学習及び教えることの難しさが日本語教育の現場・辞書類・日本語教材などにおける扱いに起因していることについて述べた。

「否定表現」については、現代日本語において高い比重を占めている表現であるにもかかわらず、日本語教育の現場では、否定表現自体が持つ構文的・意味的に複雑な性格・母語の干渉などを考慮せず、肯定文に従属した形として扱われることが多いため、その学習が難しくなっている。

副詞は、日本語辞書・国語辞典の場合、抽象化した説明がなされがちであり、また、類義語の言い換えで済まされている場合がある。また、日韓辞書・韓日辞書のように二つの言語を扱う辞書の場合は、似た意味を持つ対訳語で説明しようとする傾向があるため、その語の本質的な意味や微妙なニュアンスの学習が難しくなる。また、日本語副詞の学習において、対応する韓国語副詞がそれぞれ異なる意味の幅を持っているため、使用場面によって、その意味が変わることが多く、文表現における意味の学習が必要である。特に、日本語の学習が進むにつれ、多様な類義の表現が出てくるため、学習者は使い分けに苦労することが多い。

今回調査した日本語教科書31種(49冊)の内、本論文で考察対象とした副詞の現れ方は、「あまり29種(22冊で否定表現と共起)・とても25種(約10冊で否定表現と共起)・なかなか22種(約18冊で否定表現と共起)・ぜんぜん22種(約16冊で否定表現と共起)・どうしても7種(約7冊で否定表現と共起)・けっして6種・とうてい2種・一向に1種」のように、教科書によって、扱い方にばらつきが見られ、教科書間の共通度が低かった。また、教科書における提示の仕方は、初級レベルでは副詞そのものの指導のため取り上げるわけではなく、文型や使用場面に付随して取り上げているのが現状のようである。

このような背景を踏まえて、本論文では、刊行されている語彙調査資料と先行研究を参照して副詞をリストアップし、語義の説明や記述に「打消し」「否定」などが用いられている語、すなわち、否定表現と共起する副詞を選び、韓国語に訳した場合、類義関係にあると認められる語を取り上げることにした。韓国語の副詞は、辞書や翻訳書などで日本語の副詞に対応している語を取り上げた。その中で、日・韓両言語でそれぞれ考察の中心とした副詞は以下のものである。

日本語の副詞：(数字は収集した用例数)

あまり(598)、一向に(64)、けっして(285)、全然(493)、ちっとも(96)、  
どうしても(145)、とても(769)、とうてい(45)、なかなか(399)

韓国語の副詞：

결코(190)、그다지(120)、도무지(101)、도저히(94)、별로(195)、

発音：[gyeolko] [geudaji] [domuji] [dojeohi] [byeollo]

日本語訳：(けっして) (あまり) (全く) (とうてい) (別に)

아무래도(207)、전혀(343)、좀처럼(41)、

発音：[amuraedo] [jeonhyeo] [jomcheoreom]

日本語訳：(どうしても) (全然) (なかなか)

従来の副詞研究では用例によって論を進めることが多く、対照研究でも、その訳例が、執筆者の自ら翻訳したものがほとんどであったため、用例自体の客観性に欠ける場合がみられた。そのため、副詞のデータは、日本語と韓国語で刊行された小説・シナリオ・戯曲の対訳書(それぞれ約40作品)を用いた。また、話し言葉と書き言葉の文体による副詞の出現と用法の差を狭めるため、随筆や新聞(インターネット公開のものを使用)などの日韓・韓日翻訳書から用例を収集した。用例収集にあたって、日本語原書と韓国語訳書、韓国語原書と日本語訳書という両方向で収集を行い、考察の資料とした。

## 第2章 先行研究の概観

第2章では、まず、「否定」とは何かについて、辞典類や先行研究を参照して述べ、日・韓両言語における「否定表現」と「否定表現を伴う副詞」について概観した。

「否定」の概念については、日・韓両言語ともに、肯定の対として捉え「肯定」と「否定」とが対立関係・矛盾関係・反義関係にあるものとしている。ただし、言語表現において、「肯定」と「否定」は全く同等の価値をもつものではなく、「否定」が表現主体の積極的な意図が加わったものとしてみることも重要な観点となる。

「否定文」については、日本語の否定文は、基本的に助動詞「ない」と形容詞「ない」の二種類からなる。一方、韓国語の否定文は、否定辞「아니 ani (안 an) + 動詞」「못 mot + 動詞」の形の短型否定と、「動詞+지 ji+아니다(안하다) / 않다(anihada (anhada/anta) (しない)」「動詞+지 ji+못하다 motada」の形の長型否定がある。短型と長型の否定形式に分かれていることは韓国語否定法の特異性である。否定辞による否定表現の他に、非存在を表す「없다 eobsda(ない/いない)」による否定と、繫辞「이다」の否定語である「아니다 anida(～ではない)」による否定、「모르다 moreuda(知らない)」による否定、命令文に使われる「말다 malda(～することをやめる)」による否定文がある。

さらに、日・韓両言語における否定表現と共起する否定対極表現には、次のようなものがある。とりたてて詞は「しか/밖에 bakke」、「1+助数詞+も(도 do)」は「一つも、一人も、一回も、など/하나도 hanado、한사람도 hansaramdo、한번도 hanbeondo、など」、「不定語+も(도 do)」は、「誰も、何も、どこにも、など/아무도 amudo、아무 것도 amugeotdo、아무 데도 amudedo、など」、さらに、本論文において考察の対象とする各種の否定副詞が挙げら

れる。

日・韓両言語の先行研究を参照すると、「否定副詞」には「強調(性)」「程度(性)」という二つの側面を共通してもっていることがわかった。本論文においては、考察対象とした副詞の共通する意味を「強調性」として捉え、Austin(1962)の言語行為理論を取り入れて、対象とした副詞がもつ意味により「事実確認的否定副詞」と「遂行的否定副詞」とに二分し、さらにそれぞれを二つの類型に分類した。ただし、語によっては、各類型において連続性を持つものがある。

### 第3章 否定表現を伴う副詞

第3章では、まず第1節において、否定副詞の4分類について述べ、「事実確認的否定副詞」と「遂行的否定副詞」それぞれの分類と表現性について概観した。

「事実確認的否定副詞」は、現実の世界を記述したり、報告したりする場合に用いられるものとし、これをさらに「不可能」否定副詞と「程度」否定副詞に分けた。「不可能」否定副詞は、話し手の能力や、話し手の外的条件によって望みが叶えないか、叶えることが難しい状況であることを表す。「不可能」否定副詞には、可能性の余地を残す「なかなか」と可能性がゼロであることを表す「ぜんぜん／とうてい」を分類した。「程度」否定副詞は、文が表す否定の程度を強化または弱化させて表現するものである。「程度」否定副詞には、肯定の余地を残さず、否定の程度を強化させる「強い程度」を表す副詞「ぜんぜん／ちつとも／一向」などと、否定的な意味を弱化させる「弱い程度」を表す副詞「あまり／別に」などを分類した。

次に、「遂行的否定副詞」は、聞き手にはたらきかけるものであり、これらはさらに「不満足」否定副詞と「意志」否定副詞に分けられる。「不満足」否定副詞は、話し手や遂行者の不満を表現し、聞き手に自分の状態を伝えたり、満足できない状況を解決するように訴えたりするものである。「不満足」否定副詞には、「どうしても／どうも」などを分類した。「意志」否定副詞は、その行為を行うつもりのないことを主張したり、禁止や命令に対して自らの強い意志を表明することによって、聞き手に訴えかけたりするものである。これをさらに二分し、「強い意志」の否定副詞に「けっして／絶対(に)」を、「弱い意志」の否定副詞に「とても／どうしても」などを分類した。

第2節では本論文で直接の対象とする各副詞それぞれの分析を行った。まず、「事実確認的否定副詞」についての分析である。

「なかなか」は、「ある事態が起こることは難しい状況にある」ということを前提とし、難しい状況の中でも可能性がゼロではないこと、つまり起こる余地はあることを強調するものと捉えられる。日・韓の翻訳書において、「なかなか」が最も多く対応する韓国語の副詞は「좀처럼 *jomcheoreom*」であり、それぞれの意味・用法を対照して分析・考察を行った。

「とうてい」は、話し手が述べる状況や事態などを遂行する者の能力に対して言及し、その事態・状況の遂行が、遂行者ができる能力の外にあること、つまり、遂行する者の心理、能力、あるいは状況に、ある事態が実現される可能性がないことを表すことで否定の内容を強調するものとして捉えた。「～では」という表現とよく使われ、「そのような手段／場所／基準／状況」などの条件では、不可能であることを表す。他にも「～(ない)と」、

「～(なけれ)ば」などの表現とよく共起して使われ、このような条件の元では実現が無理であることを表す。また、「～なんて／～とは」などの予想外の状況を表す表現とも共起している。日・韓翻訳書において対応例の最も多い「도저히 dojeohi」と対照して分析・考察を行った。

「ぜんぜん」については、共起制限を中心に分析し、名詞に程度性が認められない場合は共起不可能となること、禁止表現とは共起できないことなどを論じた。また、最近盛んに論じられている肯定表現との共起についても言及した。日・韓翻訳書において対応例の最も多い韓国語副詞「전혀 jeonhyeo」と対照して分析・考察を行った。

「一向に」は、事態の他の段階への移行を前提にした副詞として捉えられるが、また、程度性を表す場合もある。日・韓翻訳書において対応例の最も多い「전혀 jeonhyeo」と対照して分析・考察を行った。

「ちっとも」は、(少しはあるだろう)、(少しぐらい～だろう)という自他の期待や問いかけに対して(そのちょっとさえ～ない)という全面的な否定を表す。意外性を表す「～なんて／～なんか」や、予想外の状況に接した驚きを表す「～とは」、「知らない／変わらない」との表現が使われて程度を表す場合もある。日・韓翻訳書で対応例の最も多い「전혀 jeonhyeo」と対照して分析・考察を行った。

「あまり」は、程度がはなはだしくない様子を表すもので、典型的な部分否定(一部肯定)となる。共起関係については、様々な意味の側面をもつ動詞と共起して、「程度」や「変化」が大きいことを表す。程度性の考えられない二者択一の状況では使うことができない。また、程度性をもたない名詞との共起も難しい。日・韓翻訳書において対応例の最も多い「별로 byello」と対照して分析・考察を行った。

次に、遂行的否定副詞についての分析を行った。

「どうしても」は、話し手や会話の主体があることを行うことにおいて、満身に思えないと感じる場合に使われ、意味としては(いくらやってみても、いくら努力しても)話し手の予想や期待に反した結果に終わることを表す。日・韓翻訳書において対応例が最も多い「아무래도 amuraedo」と対照して分析・考察を行った。

「けっして」は、話し手の発話内容に対する否定的意志、または否定的な判断を表す。「わかる、聞こえる、できる」など無意志的な状態の変化を表す場合もある。日・韓翻訳書において対応例の最も多い「결코 gyeolko」と対照して分析・考察を行った。

「とても」は、「～では」「～(ない)と、～(なけれ)ば」などの表現と共によく使われ、「そのような手段／基準／状況」などの条件では、不可能であることを表す。また、話し手や遂行者がその事態を起こす意図がありながら、結局自らあきらめることを表すものともなる。「弱い」意志を表わす場合の「とても」と「どうしても」は、「哀れ」「寂しい」「名残おいしい」「残念で物足りなく思う」などの感情が含まれているため、相手に対する配慮が感じられる。日・韓翻訳書において対応例の最も多い「도저히 dojeohi」と対照して分析・考察を行った。

#### 第4章 否定表現における副詞の日・韓対照

本章では、副詞ごとに対応する語が多岐にわたっているため、翻訳書での対応の様相と、

辞書類における意味記述の用語を調べた。まず、翻訳書（日本語→韓国語）における対応様相から、各副詞における対応語の頻度順2位までを選び、日・韓辞書における日本語副詞の韓国語説明語、韓・日辞書における韓国語副詞の日本語説明語を参考に、以下の語・語群の対応関係に整理し、翻訳書（韓国語→日本語）における対応語を対照して考察を行った。

①「なかなか」と「좀처럼 *jomcheoreom*」、②「とても／どうしても／とうてい」と「도저히 *dojeohi*」、③「一向に／どうも／どうしても／とても／ぜんぜん」と「도무지 *domuji*」、④「一向に／ぜんぜん／ちっとも」と「전혀 *jeonhyeo*」、⑤「あまり」と「별로 *byeollo*／그다지 *geudaji*」、⑥「どうしても／とうてい／どうも／とても」と「아무래도 *amuraedo*」、⑦「けっして」と「결코 *gyeolko*」

考察の観点、不可能表現との共起、意志性の強弱、頻度と程度、完全否定と部分否定などである。一例として②の「とても／どうしても／とうてい」と「도저히 *dojeohi*」の対応を示すと、「도저히 *dojeohi*」は、ある事態が全面的に不可能であることを表し、可能性に対する完全な排除を表す完全否定の意味を持つ。「도저히 *dojeohi*」は単純に話し手が記述する事件・状況を遂行する能力がないことについて言及し、「不可能」否定副詞に分類できる。また、「とても／とうてい」が「～では」を伴ってよく用いられるのと同様、「～로는 *roneun*」と共起し、そのような状況の元では不可能であることを表す。「不可能」否定副詞として「도저히 *dojeohi*」と「とても／とうてい」とは類似した性格を持っている。

また、⑥の「どうしても／とうてい／とても」と「아무래도 *amuraedo*」との対照では、「아무래도 *amuraedo*」は、「とても」と同様、否定表現を伴う場合よりも肯定表現を伴う場合が多く見られた。実現を願う意志がありながら、いくら頑張っても実現しないという点では「どうしても」に類似している。日・韓辞書においては「아무래도 *amuraedo*」は「とうてい」に対応するとされているが、韓・日辞書と韓・日翻訳書においては「とうてい」との対応は見られず、「どうしても」との対応が多く見られた。「아무래도 *amuraedo*」が「とても」と訳されるのは「わからない」という語が後に続く場合であった。「わからない」は、認識や理解の否定、つまり、不能を表す語である。「わからない」ということは、話し手や遂行者のコントロールのできない精神領域の外に存在するため、いくら努力しても不可能であることを表している。

以上、翻訳書及び辞書類において対応関係にある日・韓両言語について考察を行い、構文上、あるいは共起する語などに関してさまざまな観点から類似点と相違点を明らかにした。

## 第5章 結論と課題及び展望

本論文では、否定表現を伴う副詞を対象に、日・韓対照の立場から考察を行った。考察の対象となる副詞の共通する意味を「強調性」として捉えた上で、Austin(1962)の言語行為理論を取り入れ、「事実確認的否定副詞」と「遂行的否定副詞」とに分け、これらをさらに「不可能」否定副詞、「程度」否定副詞、「不満足」否定副詞、「意志」否定副詞に細分して考察を行った。

日・韓の対照において、単に一对一の対応語の比較で済ますのではなく、日韓、韓日の

双方の対応関係をみることにより、類義の副詞をグループ化して捉えることが可能となり、その共通する性格、また、それぞれの独自の性格を明らかにすることができた。

今後の発展として、論者自身次のような課題を挙げている。第一に、意味による分類の連続性についてより精密な考察を行うこと。第二に、肯定的意味を表す場合についてもより詳細に考察を進めること。第三に、今回用例を翻訳書から採集したが、翻訳書には訳者によって「副詞」使用に片寄りが見られた。訳者によって「副詞」を省略して訳す傾向が強かったり、原文が否定文のものを肯定文に変えて訳したりするような場合も見受けられた。このような現象を避けるために、ネイティブによるアンケート調査などを行って使用の現状を調べてみる必要があること。以上である。最後に、研究結果を日本語教育の現場に役立てるために、副詞全体に視野を広げて、言語形式に現れる使用上の法則や、言語形式に現れないニュアンスなどについて研究を深めていくことを今後の課題としている。

#### 4 総評

本論文は、現代日本語における副詞のうち、否定表現を伴うものという観点から代表的な副詞をいくつか選んで直接の対象とし、その他の関連する副詞についても韓国語において対応する副詞の意味や用法と対照することにより明らかにしようとするものである。

日本語における否定と呼応する副詞に関しては、従来の副詞の分類において「陳述副詞」として扱われることが多かったが、「なかなか」「とうてい」「全然」「一向に」「決して」「とても」など、各副詞にはそれぞれの特性があり、程度の強弱といった意味の面だけではなく、文法的なはたらきにおいても多様な姿を見せている。一方で肯定表現とも共起する「なかなか」「とても」などの各語の特徴を捉えるためには、本論文のように、最初から文法的な類別にとらわれず、「否定表現を伴う」という立場で対象を広く捉えることも有効な視点となるであろう。

本論文には、論者丁が韓国語話者の立場で日本語を学んだ経験から、辞典類にありがちな抽象的な意味記述や類義語による単なる言い換えに満足せず、対照研究の立場で、日本語と韓国語における使用状況を具体的に調査・分析してそれぞれの特徴を明らかにしたものであり、その研究成果を語学教育（特に日本語教育）に生かしたいという明確な目標が示されている。

研究方法として、多くの日本語辞書（国語辞典）・日韓辞書・韓日辞書を精査して問題となる副詞全体を収集し、さらに小説・シナリオ・戯曲・エッセイなどから、日本語作品を韓国語に訳したもの、韓国語作品を日本語に訳したものそれぞれ40点ほどの資料から問題となる副詞を収集して比較対照を進めている。具体的な一例を示すと、「とても」の例として「毎日なんてとても耐えられない」という日本語文における話し手の立場を示す情意的な強調表現が、韓国語訳では「毎日手術をすることが不可能である」という客観的な状況の表現に置き換えられていることなどが指摘されており、こうした分析の観点をさらに押し進めていくことが期待される。

ただし、いくつかの問題点も指摘される。まず、否定を伴う副詞の分類の枠組みで、「事実確認的否定副詞」を「不可能」と「程度」に、「遂行的否定副詞」を「不満足」と「意志」



とに細分類しているが、その枠組みに収まらないものもあるはずで、それらをどのように扱うべきかが示されていない。第3章では日本語作品の韓国語訳、第4章では韓国語作品の日本語訳のデータが示されているが、それぞれの副詞が必ずしも一対一で対応するわけではないという点で分析の難しさは存するものの、記述の重複もあり、問題の所在が曖昧になりがちなどところが見受けられる。また、せっかく興味深い例文を対比して示しながら、日本語と韓国語のそれぞれの表現法なり表現の発想なりに着眼して提示するというところまでいかないため、表面的な比較に終わっている場合がある。

こうした問題点はあるものの、本論文は、日本語と韓国語の副詞について実証的な手法で調査を進め、日本語副詞に対応する韓国語副詞の意味・用法、また、韓国語副詞に対応する日本語副詞の意味・用法という重層的な観点から分析・考察したものである。論者は、韓国語母語話者でありながら日本語に精通しており、文学作品などの例文の解釈や判断においてもまったく問題がない。論者自身が第5章に示しているように、本研究で得たデータを基に今後さらに調査を進め、日本語と韓国語の対照研究の大成に向かって取り組んでいく意欲をも見せている。以上により、審査員一同は、本論文を博士（学術）の学位授与にふさわしいものと認め、ここに報告する。